

【調査報告】

「湾生」 沖縄少年の戦争体験と引き揚げ
—— 玉城靖志オーラルヒストリー ——

Wartime Experiences and Memories of
a Taiwan-Born Okinawan Boy:
An Oral History of Yasushi Tamaki

菅野敦志

キーワード：オーラルヒストリー, 移動, 台湾, 沖縄, 日本統治時代

【概要説明】

本資料は沖縄在住で台湾での生活経験を有する人物へのインタビューを基にしたオーラルヒストリー集の一部である。

独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (A) (海外学術調査) 「日本敗戦と新しい国境による台湾・沖縄の変容の口述歴史に基づく研究」(課題番号: 25257009) では, 研究代表者の栗原純および研究分担者の所澤潤を中心とするオーラルヒストリーの採集・記録の蓄積を精力的に進めてきた(プロジェクトグループによる一連の成果は、『台湾口述歴史研究』シリーズとして, 2016年3月に第19集まで出されている。編集: 台湾オーラルヒストリー研究会, 発行者: 東京女子大学栗原研究室)。

オーラルヒストリーは, 語り手にとっての個別の史実をどのように一般化できるかという課題について, 証言をいかに記録化するかと同時に, 証言の批判的な読みが必要となってくる点がしばしば指摘される。しかし, 現在においても, 日本の植民地であった台湾で実際に人々がどのような環境の中で日常の生活を営んでいたのか, 「内地人・沖縄人・本島(台湾)人」の関係性や相互の感情にはどのようなものがあつたのか, 彼らが戦後お互いにどのようなつながりを有していたのか等, 当時(あるいはその後)の状況が十分明らかにされ尽くしたとは言い難い状況にある。

そのようななか, 戦後70年が経過し, かつて日本が有していた植民地での生活経験者の聞き取りにはもはや時間的余裕が残されていない。そのため, 1人でも多くの

日本統治経験者の聞き取り蓄積を残し, 公の記録ではあまり見受けられない, こうした一次史料の一刻も早い記録化と蓄積作業の進展が急がれている。このような問題意識の下, これまでの研究グループによるオーラルヒストリーの成果を基に, 筆者は研究分担者の1人として, 沖縄出身/在住者で台湾での居住・生活経験を有される方々へのインタビューを実施してきた。本資料はその成果の一部として位置づけられるものである。

本インタビュー記録は, 玉城靖志氏のオーラルヒストリーである。玉城氏は沖縄出身の両親の下, 1934年(昭和9年)に日本統治下台湾の花蓮港庁玉里郡富里に生まれた, いわゆる「湾生」(台湾生まれの日本人)である。国民学校5年生で終戦を迎え, 1946年に沖縄に引き揚げた後は久米島具志川中学校を卒業, 1951年に沖縄民政府立工業高等学校進学, 1954年の卒業と同時に中央送電に入社, 大手電機メーカーを経て1994年に退職された。

本資料は, 沖縄と台湾の人の移動とそれにまつわる個人的体験について, 日本統治時代の台湾で実際にどのような生活を各個人が経験されてきたのか, そうした実際の生活体験の聞き取りを記録化し, 研究の一助とすることを目的とする。台湾生まれである玉城氏は, 徴兵によって父親が戦死, 戦時下の台湾への空爆によって母親と弟を失っている。台湾で戦争孤児となられた玉城氏であるが, 本資料の目的は, 個人の経済的・政治的成功の軌跡を跡付けるためのオーラルヒストリーではなく, 日本統治時代の台湾で人々がどのように生活されてきたのかを記録化することに主眼を置くものである。

インタビューは2014年2月20日と3月2日の2回に分けて, 場所は放送大学沖縄学習センターにて実施した

(本記録は3月2日実施分)。なお、文中で括弧書きがある部分は筆者による補足説明である。

I. 幼少期の生活環境

菅野 お生まれになって、小さい頃からのお話を順番にお聞かせ願えればと思います。まずはお生まれになった場所についてお聞かせください。

玉城 花蓮港庁玉里郡富里鉄道官舎で生まれました。昭和9年9月10日です。

菅野 そこはどのような環境のところでしたか？

玉城 富里というところは、花蓮港鉄道、これはあの、今は花蓮と申しますけど、当時花蓮港、港の字が入る、花蓮港なんですね。花蓮港と台東間を結ぶ約100キロの鉄道で。父親がその花蓮港鉄道に奉職しております。父親、母、それから私が長男で、下に弟2人という5名家族でおります。

菅野 そこはどのような雰囲気のところでしたか？

玉城 大変のどかな場所で、それでもやはり戦時色というんですか、そういうものは子ども心にも感じるというような雰囲気でした。

菅野 戦時色が、ということでしたが、成長される過程で、どのような状況を覚えていきますか？

玉城 幼い頃ですから私が記憶し始めてるのは、やっぱり昭和16年の小学校1年生入学、この近辺から、学校にも兵隊さんが入ってくる、午前中は授業できるけれども、午後は兵隊さんに渡すという格好が続いて、戦争というのがいよいよだな、っていう感じはしましたですね。

空襲警報とかも時々、予行演習ですけれども、そういったのがあって。例えば父親が、昼はそういうことできないので、汽車を夜走らせる、ということで夜に出勤していく。ということで、戦争というのは怖いもんだな、と子ども心にも感じましたね。

II. 家族構成

菅野 ご家族の構成、まずご両親についてお聞かせください。

玉城 鉄道の職員ですから、近辺への転勤があったりして、富里、竹田、大里、安通、玉里、それから瑞穂。あの近辺を父親は移動して、それに私たちも付いて、転勤が多かったんですけれども。玉里は、花蓮と台東のちょうど中間に当たるんで、機関庫まである大きな駅でしてね。急行も停まるし、といったような感じで。他のところは小さな駅ですけれども。そこでは各駅に駅勤務の駅長さんとか、駅の職員とか、それからうち

の父は機関庫だったんで、機関庫保線をやっておりますけれども、3名は日本人だけれども、残りの職員はほとんど現地台湾の人だった、ということですね。

菅野 お母様についてお聞かせください。

玉城 大変気丈な母親でして、後の話になりますけれども、父親が出征すると、もう、自分がしっかり取り仕切らなきゃという気持ちが強かったのと、両親とも、父も母も軍国主義に固まってましたのでね、銃後の守りは自分たちという感じが強い人で。例えば、消防訓練だとか、それから慰問袋を作るとかいう時は、団結して、むしろリーダー的に動きまわっていたのをよく覚えております。

なぜリーダー的かということ、「あのおばさん遅れていたから、しっかり時間守ってくるようにと書いてあるから届けろ」とかですね、隣近所のおばさん連中の連絡の走り使いを私がさせられてましたんでね。だから、むしろ母親の方が近所のおばさんたちを引っ張っていったんじゃないか、という気を強くしております。

菅野 ご兄弟について記憶に残る思い出などはありますか？

玉城 私が長男で、次男がいたんですけれど年子でして、学校も一個だけ下という。私がこの弟と死に分かれたのが11歳の時で。弟が10歳だったと思うんですけれども、とにかく、母親からの受けがいいんですよね。それに対して私は親に叱られてばかりいたんで、「ゴマすり野郎」と思っていたんですけれども、なぜそうやって弟が受けて、自分が受けなかったか、というのはまだ分からずじまいでいるんです。

ただ、最後に分かれた日は、(昭和)20年の7月12日のお昼ご飯、食後に、その時父親は戦死しておりましたので、子どもたち3名と母親がお昼食が終わった途端に空襲警報が鳴って。3番目の弟が飛び出して。そしたら母親が私の次の弟に、三男の弟を「追っかけて連れてこーい」と言ったんですけども、弟が嫌だって言うんで、なんだかその時だけ母親に「嫌だ」って反発したんで、それじゃ私に弟を探す役目がまわってきたんですね。それで私はしぶしぶ「このバカは」って弟の頭をコツンと叩いて、探しにいった弟がいたんで、帰ろうとした時には敵の飛行機が上に来ていた、と。それで仕方なく近くにあった防空壕に逃げ込んだんですよ。

で、次男は母親と一緒に残って、近くにあった防空壕に入った。それがもう別れだったんですね。だからあの時に母親の言う通りに弟が素直に出て、私が残っていたら、私はもう母親と一緒に亡くなっていただろう、と。

そういうのがあって、なんだか今でもこう、モヤモ

ヤした気持ち。済まないという気持ちと、「ゴマすり野郎」って言って弟に文句ばかりたれていたということについてはね、なんか忸怩たるものがあるわけなんですよね。

この三男坊というのは後になって、両親が亡くなってから、父方の叔母に私たち引き取られて帰ってくるんですけども、その父方の叔母のところには子どもがいなかったんで、その後継いで養子に入って、今でも元気で暮らしております。

III. 幼少期、国民学校

菅野 学校は、小学校からでしょうか？

玉城 そうです。今にして思えば、あの頃国民学校と改正されたのが昭和16年で。国民学校になってからの一番最初の入学生だったのを覚えております。

ただ、あの頃不思議だったのは、父の同僚というか、下で働いている台湾の人たちの子どもたちが、お家に帰ってくると皆一緒にいるのに、学校だけは彼らと全然別個だったと。それで、彼らの行くところは「公学校」と呼ばれていました。仲の良い台湾の友達もいっぱいいたんですけど、「なぜ一緒に行けないんだ」と。

小学校1年ですからね、「行こうよ、お前行こうよ」、「潘（パン）くん行こうよ」と言ったら、「俺は日本人だけれども、下の日本人だから行けないんだよ」と。そう言って。「なんで下と言うんだろうな」というんでね、それ以上に向こうも言わんし、こちらも「あつ、これは聞いちゃいけないことを聞いたんだな」というのを感じたんで、聞けずにいた、という格好ですね。

菅野 学校の名称は。

玉城 富里国民学校です。ここで過ごしているうちに、竹田に父親が転勤になったんです。竹田から富里まで通って、富里の国民学校に通いましたね。

菅野 何年生の頃でしたか？

玉城 3年生ですね。

菅野 この富里国民学校の環境はどのような感じでしたでしょうか？また、通学はどのようにされたのでしょうか？

玉城 もちろん鉄道の職員の子どもですから免賃で、汽車賃もタダだったというのは記憶しております。それで、竹田という駅から富里までは二区間あるんですけども、富里の駅を降りますと、自分が生まれた鉄道官舎のそばを通過して、約500~600メートル位行くと、本当に1キロもないところに、この富里小学校がありましたんでね。当時としては道も駅前で大通りで、ちょっと坂があったんですけども、綺麗な学校で。2階建てのコンクリート建ての立派な学校でした。

で、毎朝校長先生による宮城遥拝がありましたしね。陛下のご真影に頭下げる、と。宮城遥拝という格好でそういうこともありましたし。運動会なんかも楽しい思い出がありますね。

菅野 毎日の通学されていた時のことで思い出に残っていることはありますか？

玉城 同じ汽車の中に、中学じゃない、高等部って言う…あの時皆高等部って言うって、6年後の…。

菅野 国民学校の高等科のことですね。

玉城 高等科ですか、そう、2年間あるんですよ。そこに通っている隣のあんちゃんとか女学校のお姉ちゃんたちが、食事取らなかったのか、取れなかったのかわからんけど、汽車の中に入ってから、温かい弁当の中に玉子落として玉子ご飯作って食べるんですよ。で、それを見ていたら「お前も食べるか」って言って分けてもらったりですね、そうした兄ちゃん姉ちゃんたちがいっぱいいた、ということ。それから、ほとんどの軍歌の勉強は、その列車の中にいる時に、腕白坊主の親分みたいなのが、ガキ大将みたいのがいてですね、軍かを色々教えてもらったという風な感じですね。

菅野 毎日のことですから色々思いではあるでしょうけれども。

玉城 そうですね。で、あそこはあの、何ていうか、川があって。夏場は干上がってしまっって、大雨が降るとワーッと水かさが増す川がいっぱいあったんですよ。それで橋げたから川にこう飛び込むのがですね、それをやらなきゃ兵隊に、軍隊に入れないとか、海軍に行けないとか言ってますね、ガキ大将から言われて何名かで行って飛び込んだりしてですね。したたかお腹打ってキツイ思いましたのを覚えてます。

菅野 富里国民学校が、先ほどはとても立派な学校だったと言われていましたが、学校の設備や、校庭でどのような遊びをしたかなど覚えていらっしゃいますか？

玉城 そうですね。設備はちょっと覚えておりません。オルガンはありました。校庭も運動場がだだっぴろくて…。

遊びもですね、授業時間の中でも、運動帽をですね、ひさしを前に被ると戦艦なんですよ。横にすると巡洋艦。で、後ろにすると潜水艦。で、戦艦は巡洋艦をやっつけることができます。巡洋艦は潜水艦をやっつける。で、潜水艦は戦艦を。それで分けるんですよ、何名か、20名ずつ位分けて。親分がいて、最初に決めるのは先生ですよ。戦艦1隻に巡洋艦2隻潜水艦5隻とか。

で、向こうが、よし、潜水艦が少ないんだったらこっちは潜水艦を多くして、あの戦艦から沈めなきゃいけないからって追っかけて行って、タッチすると撃沈な

んですよ。それで、帽子まで取ると、轟沈なんですよ。で、轟沈すると、潜水艦から巡洋艦に位が上がるんですよ。そういった遊びをね、させられましたね。させられたっていうより、授業の中で。

だから、授業の中でやる体育、(当時は)体育って言いませんでした。体操の時間にはそれやっていました。だから休み時間になってもその練習だというんでね、そういうような遊び。ほとんどそればかりなんですよ。

後は棒倒しなんかありましたよね。棒倒しはとにかく高いところに誰が乗るかっていうんで、それもアメリカの国旗みたいなものを掲げて。あっ、アメリカの国旗と中国の…当時支那ですよ、それをこっちアメリカの国旗、こっち支那の国旗、って言ってワーツと握って引き倒してそれを取る、っていうような格好です。

菅野 国民学校での行事や大会とかで覚えていらっしゃることはありますか？

玉城 行事っていうのはほとんどなかったですね。その頃から。特に汽車通学でしたから、授業終わったら早めに帰れ、ということですから。学校での行事っていうのは、遠足、運動会。で、運動会は、例の通りの陣地取りだとか、今さっきの、船にあしらっての、戦争を模しての競技しかなかったです。

ただ、遠足はですね、富里からもう一つ二つ行ったところに池上っていう、池の上って書くんですけども、ここは唯一台湾でお米のおいしいところで。そこに湖があってですね、そこに遠足に毎年行くんです。それはなぜかといったら、遠足が向こうに合わせたのか、向こうがこっちに合わせたのかわからないんですけども、飛行艇が降りてくるんですよ。で、飛行機乗りになるには、ああいう飛行機もあるんだよ、っていうんで、それ見て(飛行機乗りになって戦争に行くんだと)燃えていた、って感じは覚えております。あれは2回ほど、2年の時と3年の時ですかね、2回とも飛行艇を見に行って感激したっていうのを覚えておりますね。行事としてはその程度で、他はあんまりないですね。

IV. 先生、同級生、先輩

菅野 通われていた学校で、好きな先生や嫌だった先生などの思い出はありますか？

玉城 例えば、男の先生では、名前は忘れちゃいましたが、とてもキビキビした…。私はとても体操が苦手だったもんで、逆上がりを教えてもらったり、鉄棒の回転を教えてもらったりして。「お前これ10回回転したら

飛行機乗りになれるよ」てな感じでやったり。それから、女の先生で独身の先生がいたんですけども、とても私可愛がってもらって、兄弟2人年子で入ったもんですから、運動会の帽子も、赤白の帽子作らないといけない時に、母親と連絡とって、(先生が)「一つ自分が作ってあげるから」っていうんで、私の分はその先生が帽子を縫ってくれたっていう。唯一それだけは今でも覚えております。

菅野 先生方はどちらの出身かは覚えていらっしゃるでしょうか？

玉城 それまでは覚えていませんね。

菅野 例えば沖縄出身であるとか本土出身であるとかといった印象は。

玉城 内地の方だったことは覚えております。ただ、当時私の記憶が正しいのか、そういうシステムが出来上がっていたのかはわからないんですけども、同じ師範学校出身でも、内地の方ですと内地の学校に勤めることができたけれども、沖縄の師範学校出身は公学校の先生しかねれないとか、そういうような感じで。あの、桃原(とうばる)先生って、もちろん「ももはら」って書くんですけども、2、3駅離れたところの公学校があったんですけども、その先生している人がいらしたことは覚えております。

菅野 今は好きな先生について伺いましたが、逆に「嫌だな」と思った先生はいらっしゃいましたか？

玉城 いえ、小学校3年4年までは。台湾に限って言えば、あんまり悪い人が出てこないんですよ。私の場合。怖い隣のおっちゃんとかおばさんとか、ガキ大将を含めてですね、嫌なとか、恐ろしいとかいう人たちには出会っていません。

菅野 先生から怒られるということもなかった？

玉城 はい。ですから、学校は大変楽しかったです。台北だとか、台南、台中、高雄といった大都市には、そういうことがあったということは後で私たち台湾帰りで集まった時に聞いてますけど。花蓮っていうところは、特にああいう田舎になりますと、お互い「故郷を離れて来ている」って思いが大人の中にあっただんじやないかと思えます。それと、戦時中ですから、「助け合わなきゃいけない」という気持ちが強かったんじゃないかと。そこら辺、大人にしても、今のわれわれからいうと、もっと純粋であったであろう、という風に考えます。

菅野 国民学校ではクラスに何人位いたかは覚えていらっしゃいますか？

玉城 30名はいなかったと思います。

菅野 同級生や先輩などで思い出に残っている方はいらっしゃいますか？

玉城 小学校の時に、飛田（とびた）くん、ヒダって書いて、飛田くんって子がいたんですけれども、学校から帰る時に、駅で汽車を待っていると、「おやつを必ず（僕の）家で食べろ」と、（飛田くんが）駅長の官舎まで連れていってくれた。後で、出身は鹿児島って聞いたんで探してみただけだけど、探せずそのままになっております。

菅野 遊びはどのような遊びをされていましたか？

玉城 ビー玉とメンコやったですよ。これがもう大好きで。これはもう小学校4年か5年になっての話ですけども、敵の飛行機が落ちたら、そのジュラルミンを溶かしてですね、（ミニチュア）飛行機を作るんですよ。そういう遊びもやりましたね。

それからガラスの風防がありますよね。あれガラスじゃなくてプラスチックみたいなのだったですよ。それを削って飛行機の形にして首から下げて威張ってたような感じが…そういう遊びもしましたね。全てが「勝つか負けるか」、「戦い」ってものが常に生活の中に染み込んでいたっていうようなのが子どもの世界にありました。

V. 台湾人の友人

菅野 他には先輩やクラスメートとのエピソードで思い出すことはありますか？

玉城 先ほど出た潘くんですけども、小学校を終わって中学に入るとですね、彼らも日本人と同じような中学校に行きよったんです。それで中学に入るとですね、必ず「新高山」に登る習慣が当時の台湾の中学校の中にあったと覚えています。で、「お前も一緒に、中学校に入ったら新高に登ろうな」っていう話をしたりしたことは覚えております。

菅野 バンくんはどういう字を？

玉城 ハンです。さんずいに番です。ハンです。

菅野 国民学校はその当時は一期生なので、まだ台湾人と日本人は一緒ではなかった…？

玉城 なかったですね。中学から…中学に入る台湾の人っているのは本当に1人か2人なんです。だから、彼らだけの学校作るわけにはいかなかったんでしょうね。と同時に、中学まで勉強したら、本当に日本人の中にいれるよっていう意識があったのか。そこら辺は推測ですけどもね。中学からは皆、台湾の人も一緒だったっていうのは覚えております。

菅野 公学校を国民学校と名前を変えたということですかね。

玉城 そういうことです。

菅野 日本人に対して、台湾人の子どもたち学校に何人

位いたんでしょう。

玉城 向こうの（台湾人の）学校のことについては、聞いちゃいけないもんだと思ってましたんでね。全く学校のことについては。ただ、最初は「お前この字わかる？」って聞いたりしよったけど、それも向こうが「わからない」ってのが多かったんで、「ああ、程度低いんだな」って思ってそれ以上聞いちゃいけないんだな、って、それ以上は自分で感じ取って聞かなくなっ。学校の話は一切しないです。

ただもう、連中と遊ぶ時には、「落花生明日掘りに行くんだけれども、お前も来て、取ったら欲しいだけ持って行っていいよ」とか、「稲刈るんだけども、稲刈り行って、脱穀機で削いたら、自分で漕いだ分は舂持って行っていいよ」とか、そういう思い出はあるんですけども、そういう程度で。だから、歳重ねるにつれて疎遠になっていくんですよ。

菅野 先ほどの潘くんはどのようなつながりでしたか。

玉城 父親の部下の子だったと思います。5、6名固まって遊ぶんです。それだけしかいませんからね、鉄道官舎には。鉄道官舎から200~300メートル離れたところに部落があって、そこには大勢いるんですけども。例えば、醤油屋のかっちゃんとかいう、内地の人もいっぱいいたんですけどもね。そういう人たちは、鉄道は鉄道であんまり向こうとは…。向こうは商売人でこっちはお役所仕事っていうんで、向こうもあまり寄ってきません。学校では一緒になりますけどね。

決して仲悪いとかそういう意味じゃないけど、自然と大人の社会と同じように、隔てられた中で、その中で向こうまで出かけて行って、っていうのはないんですよ。だから台湾の連中とやるのは父親と一緒に、父親と向こうの父親が話すし酒飲むし、向こうのおばさんが野菜持って来たり水汲み手伝いに来たりするっていうんで親しくして。「鉄道一家」としてのつながりなんですよ。それはむしろ街に住んでいる日本人とは違う雰囲気があったですね。

菅野 官舎の遊び仲間の中では日本人と台湾人の比率はどのようなものでしたか？

玉城 日本人はほとんど日本人、台湾人は台湾人。私がどっちかという台湾人の連中と仲良くして、私のところに台湾人が5、6名遊びに来るけれども、私1人の時は日本人社会の中で、という感じでしたよ。だから日本人社会の中には14、5名日本人の仲間がいて、で、彼らが誰も遊び相手がない時あるでしょ、その時には台湾の連中のところ行ってワーッと騒ぐと。

菅野 基本的には棲み分けられていたんです。

玉城 当時できてましたね。向こうも遠慮するし、こちらから強いてまでは、って感じでした。

VI. 楽しかったこと、悲しかったこと、戦時下での思い出

菅野 楽しかった出来事がありますか？

玉城 楽しかった出来事としてはですね、父親は昭和16年に出征してからジャワで戦ってるんです。で、帰りにシンガポール、当時は昭南島って言いよったですよ、昭南島に寄って、山下奉文と戦ったパーシバル中将、捕虜になってますよね、彼を台湾まで連れてくる役目を仰せつかって、一度台湾まで帰ってきたことがあるんです。

それで、親父としても鼻高々でしてね、自分がやったんじゃないのに、「俺パーシバル連れてきたから見に来い、面会しに来い」っていうんで、玉里から、当時転勤で玉里に移っていたんですけども、高雄まで。親子4名、母親入れて私たち兄弟3名で親父の面会をしに行った。

で、汽車しか乗ったことなかったんで、台東から恒春っていう所があるんですけども、あそこまでバスで山の中走るんですけども、初めてバスに乗って、「ああすごいもんがあるなあ」って喜んだ覚えがあります。これが昭和18年の3月です。

それで、その面会を終えて、「じゃあもう一度行ってくるから」と出かけていった父親は、翌月の昭和18年の4月16日に、ジャカルタの沖、ニューギニアの近くですかね、オビ島付近海上の作戦で戦死、と。その戦死は悲しいことですけど、面会に行ったってことは、後にも先にも一度だけの家族旅行で楽しかった思い出として覚えております。

なぜかっていったら、当時旅行なんてのはとてもじゃないけど許されなけれども、父親面会という大義名分がありましたんでね、もし何かあったらいけないから、っていうんで憲兵付きで乗るんですよ。バスも。列車もそうでしたけれども、乗り物は必ず憲兵が付いて乗ってた。だから、かっこいい憲兵のおじさんがいて、「どこ行くんだ」っていうから、「父親に会いに行くんだ」って言ったら、「そうか、よくお父さんの顔見てくるんだよ」って言ってくれたのを覚えております。

菅野 悲しい思い出にはどのようなものがありますか？

玉城 父親は昭和16年に出征してから、昭和18年の4月16日に戦死広報が入って、お袋1人でどういう気持ちで自分たちを育てる決心をしたか、と。加えてですね、台湾東部、いわゆる花蓮～台東線で最後の空襲といわれた昭和20年7月12日、そのお袋も弟と一緒に防空壕への直撃弾で逝ってしまったこと。これ以上の悲しみはありません。

後一つ記憶にあるのは、「父親の遺骨を取りに来い」と軍からの連絡があって、場所は覚えてないんですけども、確か花蓮だったと思います。花蓮まで随分汽車に乗ったような感じがしましたから。あの頃玉里～花蓮ってのは3時間位かかったんですよ。多分花蓮だったと思いますけれども、父親の遺骨を取りに行ったんです。母親と一緒に。

そして、父親の遺骨（のに入った箱）を僕が胸に下げて帰ってくる途中で、何か中でコロコロ音がするもんで、帰ってきてからお袋に「開けてみよう」って言ったんです。そしたら、「そんなバカなことするな」って止められたんですけども、夜になってどうしても気が済まないんで、夜中に私一人で開けてみたんです。

そしたら、白いハチマキと、何か字が書かれてあったと思うんですが、覚えておりません。多分、「尽忠報国」だったんじゃないかと思えます。多分そうだったと思いますが、真っ白い綺麗な、汚れていないハチマキでした。それと、石ころが二つ。小石が二つだけでした。で、翌日お袋に言ったら、うんと叱られましたけども。だけど、それ聞いた時のお袋の気持ち、今思うと、どういう気持ちだっただろうと…。これ以上の悲しいことはないと思います。

菅野 戦時下の状況がお話の中でありましたが、鉄道官舎で台湾の方々とも生活されていた中で、戦時下の状況の下で台湾の方々とも何か思い出に残るようなことはありましたか？

玉城 この時期になりますとね、もちろん台湾人も日本人だったんですけども、本当の日本人の職員で元気な人たちはほとんどもう兵隊にとられて、鉄道そのものが、例えば機関手も、車掌も、駅長も台湾の人たちに取って代って。台湾の人たちで動く、と。

例えば鉄道では、作中に脱線事故なんかにあって怪我して、かといって内地に帰るわけにはいかないからって鉄道官舎に住んで恩給で暮らしているおじさんもいたんですけども、その人も駅に出て改札するとか。そういう切羽詰まった状況で、台湾の花蓮港鉄道もほとんどもう差別ができないような状態まで追い込まれていたっていうのは子ども心に覚えています。列車も軍用列車以外は走らない、それも夜間運行のみ、という状態で。

でも彼らは、僕なんかは汽車に乗る時に、やっぱり台湾人の子どもは後ろに並ぶし、日本人の子どもは前に並ぶのが当然みたいに、「さあさあ乗って」って言ってから、自分たちの子どもたちには「さっさと乗りやがれー」っていうような、叱り飛ばすっていうような感じで、日本人に対する態度っていうのは丁寧な態度をとっていましたね。それがお世辞だったのかはわか

りません。けども、彼らはそういう風にして日本人に対する態度というのは礼儀正しい態度をとっておりました。それはよく覚えております。

潘くんなんかの家に遊びに行くと、「ヤス坊、夕ご飯食べて帰るなよ」って、必ず夕ご飯まで食べさせてもらったりですね、それから「この前あんたとこのお母さんからもらった生地で女の子の洋服作った」って、そういう話はしてましたけども。とにかく丁寧な扱いをしていただいたっていう記憶はあります。

菅野 潘くんのお家で食事をご馳走になった際に、食事の面で「違うな」と思った所とかはありましたか？

玉城 ありました。食事の仕方、当時の台湾の人たちというのは、今の台湾ではそういうことはないんですけども、彼らの食事っていうのは、大きなどんぶりにご飯を入れて、おかずをワーッとつけて、表に出て、表を見ながら食べるんですね。そういう子どもたちが大勢いたんで、「あれ一度やってみたいな」ってな感じで。で、うちはそういうことはとっても厳しかったですから、ちゃんと正座して、っていうような感じで。

おかずもそれぞれの鉢に入って出てきよったんですけども、台湾の物はもう、自分の好きなものだけでいい、欲しいだけ取って食べるのを見て、「ああいう食事もいいなあ」っていう感じを受けましたね。(笑い)

おかずは5～6種類位はあったんじゃないですか。それと、台湾の(国民学校)高等部の人たちで弁当持ってないのは、チマキを2～3個腰にぶら下げてるのを見て、「あれ一度食べてみたいな」と思ったりして、羨ましかったです。(笑い)

VII. 敗戦から引き揚げまでの生活

菅野 では次に、敗戦ということになって、その状況について教えていただけますでしょうか。

玉城 はい。7月12日にお袋が死んだ後、台南に父方の叔父叔母がいます。で、連絡とって叔父が迎えに来てくれて、台南まで行くのに約ひと月かかりました。それで、台南の叔父は、嘉義なんですけども、嘉義に台南製糖ってのがありまして、叔父はそこに勤めていたので、そこに着いて4～5日経つと8月15日の終戦となりました。

日本人の私たちは「終戦」という言葉使いますけれども、彼らにとっては「日本敗戦」ですよ。これが終わった途端、日本人に対する反抗といいますね、そういうむごつたらしいことが起きたのをよく覚えております。

当時、毎日ご飯を食べたらどこか、台南も田舎の方

でしたけれども、家に宿舎が、製糖工場の社宅がいっぱいあったんですけども、そこにいたら工場も近しい危ないから、できるだけ食事終わったらどっか田舎に行って防空壕掘って入っとれ、っていう位ひどかったんです。当時は。その日も、叔父は仕事ですから、叔母と弟と3名で、自分たちが「ここだ」って与えられたたこつぼに行って2、3時間もたたんうちに叔父が来て、「戦争負けたんだよ、帰ろう」ってなって。

で、社宅に着く頃にはもう、この台湾人の日本人に対するむごい仕打ちが始まっていたのをよく覚えております。それはまあ、監督がひどかったのか、彼ら(台湾人)にとってひどいと思われたのかわからんけど、ほんとにこう、家族の前で殴打するのを目の当たりにして。「ああ、戦争に負けるってことはこういうことなんだ」ってことを子ども心に恐怖を覚えたことがありましたね。

で、2、3日経って、「もう(外に)出るな」ってことで、今度は防空壕は行かなくていいんだけども、「家から出るな」ってことでお達しが出ていたんで、家の中にいると、そこでも台湾の子どもたちがいっぱいいました。「遊びに行こう」って誘われて。それで、「いや、僕は「今出るな」って言われてる」って言ったら、「お前琉球だろ、琉球は大丈夫なんだよ、一緒に行こう」って言うんで、大きな川があったけど、川へ行ってエビとったり魚とったりしたという記憶はあります。

その後叔父が、技術者としていたもんですから、「技術指導」という格好で少し残らなきゃいけない、と。で、期限は何年かわからんけど、とにかく月単位じゃなくて年単位で残らなきゃいけない、ということ。

菅野 留用ですね。

玉城 はい。で、学校も行ってみたら中華民國の旗で、それで授業も、国歌斉唱、三民主義の(中華民國)国歌ですね。あれ歌ってから授業。だから私まだ三民主義の歌、まだ頭の中に入っております。

で、映画館なんかも連れていってもらったんですけども、やっぱり映画の始まる前も、国歌を歌ってから映画を始めるとかいうような格好で。それでまあ、孫文の話とかですね、そういった話とか物語とかいうのを、「中国語でしゃべっていたのわからん」って言ったら、じゃあ1人の日本人のおっちゃんが出てきて、台湾の人だったんですけど、孫文の話、本を読み聞かせてくれてですね。ああ、孫文っていうのはすごい偉い人なんだな、というふう。

で、これは嘘かどうかわからないですけども、日本の軍隊を全部武装解除したんですけども、これじゃあちこちで、製糖工場なんかは砂糖いっぱいあるのを全部強盗団が入って物盗っていくんですよ。で、蒋介石

石軍としてはこれはたまらなくなってしまったんでしょうね。その台南の軍隊の武装解除を元に戻して、日本の兵隊がその倉庫の守衛に就いたらあれ(盗み)が止まった、とかですね。

確かに、台南の飛行場を見にいったんですけども、蒋介石軍が乗ってきた飛行機なんてのもまだ複葉機でしたもんね。日本はもう、ちゃんと双発の飛行機が、エンジンが二つずつ付いた飛行機が飛んでる頃にまだ複葉機のね、あんなもんで飛んできて、製糖工場を守るために派遣された軍隊なんか、兵隊なんか来ても、日本の菅笠みたいのをかぶって、両方に天秤棒かついで、それで門のところにとむろしてるんですよ。で、見ていたら、あっち行って野菜買ってきたらこっち行って水もらったりして、そこで石ころ集めて釜戸作ったりして、そこで食事作り始めるんです。兵隊が。

「あれー中国軍ってのは相当金持ちかなって思ったけどなんか貧乏だな」って聞いたたら、「彼ら(中国兵)なんかは1日2回しか食事とれないんだよ」って聞いて、「なんだやっぱりチャンコロか」って。つい。本当は「チャンコロ」って使っちゃいけないんですけども。その頃はもう11(歳)ですからね、自分の考えているのが少しずつ出てくる頃で。「チャンコロって言って彼らを蔑視するのはまずいな」って、色んなことを子ども心に思いましたよ。

菅野 なるほど。そして台湾から引き揚げることになったんですね。

玉城 それで2年ほど経って、「じゃあ帰ってよかろう」っていうんで、基隆の岸壁に倉庫があったんですけど、「皆そこに集まれ」って。でも皆思うように集まらないんで、皆が集まるまでにまた2、3カ月基隆に抑留されて。で、2年目の冬の12月ですかね、ようやく沖縄に帰ってまいりました。

菅野 1947年でしょうか。

玉城 47年です。47年の12月だったと覚えてます。

菅野 47年2月の二・二八事件のあたりは影響は感じられなかったですか。

玉城 ないです。はい、ないです。

菅野 台南にいらしたんですよ。

玉城 はい。台南から基隆に集まったんですよ。だから、この二・二八は基隆の近くですからね、あの社寮町だとか、それから今の蘇澳、南方澳ってのは近くですからね。その近辺の住民たちが犠牲になっていたようです。

でもあの、知っとるべきなんだが、これ(二・二八事件)だけは全然ないんですよ。私の記憶の中に。

VIII. 台湾人の「琉球」と日本への感情

菅野 先ほど、台湾の子たちに「遊ぼう」と言われて、「沖縄の、琉球の人は違うから」ってことがありましたが、他にもそういう「琉球だから」と扱われたような思い出はありますか？

玉城 いや、これっきりですけども、何回かの中に、「なぜ琉球なのか」って聞いたたら、「日本人は一等国民、琉球は二等国民、三等が朝鮮と自分、台湾だ」と言ったら、もう1人が、「いや、琉球は二等国民じゃなくて、兄弟の関係だ」と。だから、兄弟は叩かん、と。というようなことを言われた覚えがありますね。

菅野 敗戦となって沖縄に戻られるまでの間に台湾の中で色々な混乱があったと思うんですけども、その戻られる間の2年間で、日本人が報復を受けたりする以外で何かありましたか？

玉城 要するに「技術指導」という格好で残されているもんだから、案外台湾の人たちもこちらには、例えば「お米不自由してないか」って言ってお米持ってきたり、皆買い出しみたいで、着物持って行ってお米に換えるとか、やれこれを出して、時計を持って行って何か食べ物に換えるとかなさった方々もいるって聞いたんですけども、家の叔父叔母に限っていえばそういうことはなくて、むしろ、「今日お魚が入ったよ」とか、「今日はこういうのが出来たよ」とか。食べ物は沖縄より良かった、引き揚げた後の沖縄より台湾の食事は良かった。終戦後の食事は本当に不自由なく食べさせてもらったっていう感じがあります。

菅野 よく言われるような、台湾の人は、中国から外省の方が来られたことで日本人に対する評価が高まったという、中国から来た人に対する失望が非常にあったといいますが。

玉城 あったと思います。それを感じたのは、終戦後しばらく、32年経ってから、母親の(亡くなった)防空壕の跡がどうなってるかっていうんで訪ねていったことがあるんですけど、その時にとっても感じました。1970年代半ばになっても「犬去り豚来たる」なんて、こう書いてあるのがいっぱいありましてですね。

花蓮空港に着いた時にそれを見ました。「なんてことだ」と思いましたですね。で、「俺なんか犬か」って言ったら、「豚よりいいだろ」っておじさんが言っていました。(笑い)

菅野 それはどこにあったんでしょうか？

玉城 花蓮空港のね、空港敷地を囲むレンガの塀がずーっとあったんですよ。そのレンガの塀にいっぱい書いてありまして。大きく。こっち側には「大陸反攻」と書かれていたのを覚えています。

菅野 それは消さないんでしょうか。「犬去り豚来た」っていうのは外省人からみたら「豚」と言われているわけですから、それはなぜ消さないんでしょうね。

玉城 あれはね、消しても消しても翌日になったらまた書かれてるんです。

菅野 誰かが書き続けているんですか？

玉城 本省人でしょうね。だから、ペンキの色は新しいんですよ。本省人が外省人を豚と書いて、外省人は消すんだらうけど、消してもまた書かれる。だけど、そう言いながらも、日本の肩を持つ外省人もいたんです。例えば汽車なんか、日本語の「発車オーライ」（というかけ声）じゃなきゃ出発しないんだ、って感じでね、本省人の駅員が言ったのを誰かが台北の鉄道局にたれ込んで。当時日本語は禁止されていたはずなんだけれども、しかし、「日本の満鉄で育った」という外省人の高官のお墨付きがあって、それが許可された。そういった日本の肩を持つ外省人の高官もいた、という話もありますからね。これは終戦後32年経って台湾に戻った時に聞いた話です。

菅野 終戦後の2年間では日本人に対する感情の起伏はそれほど激しくはなかったんでしょうか。

玉城 様子見していたんじゃないですか。どういうもんだらう、と。しかとわかりません。でも言えることは、台湾の人たちは私に対しては好意を持っていてくれたのだと感じています。だから今でも、ここでいうシーミー（清明）ってあるでしょ。向こうではお墓の、先生ご存じでいらっしゃると思いますけど、掃墓節って書くんです。その時にはもう、そこにいようととにかく帰らんと破門になるっていう、今でもそれは強いでしょ。

台湾は、（清明が）昨日だったかなんですよ。「お前んとこのお母さんの分まで線香あげたから安心しろ心配するな」って昨日も夜遅くに電話が入ったりして。（涙ぐむ）

菅野 ありがたいですね。

玉城 はい、大変ありがたいです。

IX. 沖縄への引き揚げ

菅野 では、台湾から沖縄にはどうやって戻ってこられたのか、戻ってこられてからの状況を教えていただけますでしょうか。

玉城 帰ってくる時はですね、米軍の引揚船で。LSTっていうんですか、案外大きな船でした。基隆から。船の中で初めてアメリカ系の食事を出されて、おいしかったのを覚えてるけど、一つだけ、乾燥キャベツの煮たのが出てきて、あれは臭くて…。（笑い）「こんな

まずい物食ってるのかヤンキーは」と。（笑い）後は、チーズだったかチョコレートだったか、そういった物を子ども心に「いやーすごい国だな」って思って食べたのを覚えています。

当時の引き揚げはですね、中城湾の久場崎っていう所があるんです。そこが引き揚げの場所だったんです。その久場崎に収容所がありまして、その収容所に一旦収容されて、それでそれぞれ出身地に戻る、という格好なんですけども、私は戦前の沖縄っていうのをまるっきり知らないんで、「ああ、こういう所か」と。

それで、年寄り、特に叔父叔母なんか、周りのおっちゃんなんか「いやーこれ、本当に国破れて山河在りっていうけど、山河もどこいったかわからないじゃないか」という位形変わってるよ、と言って嘆いてるのを見て、「ああすごい所なんだ」と。だから、台湾にいた時も、その叔父の友人だとか私の父親の友人が、「沖縄はもう玉碎だから、帰ったってしょうがないからずっとここにいた方がいいよ」と。「食べるのはあんたが心配ない、家もちゃんと造ってあげるから」って言われる位、慰撫されたんですよ。だけど叔父は「いやいや、一旦帰ってから、何かあったらお世話になるかもしれないけど、一旦は帰るよ」って言って帰ってきたんですよ。

で、帰ってきたら叔父叔母にとっては（沖縄が）とんでもない格好になってるもんだから。それで、那覇高校のグラウンドにテント小屋があって、割り振りがあって、そこに入ることができた、と。後はもう、叔父叔母は仕事を探さなきゃいけないっていうんで、米軍の部隊の食事の見習いみたいなもので入れたんで、帰ってくる時には、やれパンの残りだとかチーズだとか、「これがハムっていうらしいよ」っていっぱいもらってきて。食事には本当に、小さい時からあんまり困ったことはないんで。

あと、学校に戻るってことになった時に、台湾で2年もブランクあるもんですから、せめて1年落とせっていうんで、昭和10年の連中と学校に戻ったっていう記憶があります。だけど、考えてみると、沖縄だって戦争で学校やってないですからね。だから元通りに戻っておけば1年先に社会に出られたんかな、と思いますけど。

沖縄タイムスなんか戦争終わって発刊始めた時期だったですよ。その新聞配達だとか、自動車もない頃ですから、皆荷物買ったら荷車みたいな物に乗せて引っ張るんだけど、後ろから子どもたちに押させてお駄賃くれるようなのとかが那覇の中であったりしたもんですから、そういった格好で中学までは（叔父の家に）お世話になって出たんですけども、高校入って

からはちゃんとアルバイトも見つけて。小さな発電所だったんですけれども。この発電所っていっても、米軍の発電機の払下げを使ってやるものですから、(深夜)12時になったら消すんですよ。で、翌日は夕方4時5時頃から電気つける、と。

台湾帰りの人で、この人は台南工業出た人で、「ヤス坊お前、電気やっとなるんだったら発電機の一つ位覚えとったらいいよ、理論は後からだ、とにかくエンジン起こして送電して故障したらまた配線して、つてのをやった方がいいよ」って言うんで、「ああありがたい話だ」って。そこでアルバイトしながら。

当時はもう本当に皆「着た切り雀」でね。何も無い時代ですから。私なんてのは、むしろ叔父叔母がいて面倒みてくれたってだけで、特に何か食べ物に困らんような。(笑い) どんな境遇に転んでも、食べ物だけは入ってくるような境遇に恵まれましたんで、叔父叔母には大変感謝しておりますけど。

菅野 高校も沖縄で出られたんですね。

玉城 そうです。高校も民政府が許可出して、沖縄の人で電機事業起こして構わないよ、とお達しが民政府から出て。USCAR っていうんです。United States Civil Administration Ryukyu Islands だったですかね。USCARが「発送電会社を設立してよらしい」っていうんで。沖縄電力とはいわなかった、沖縄配電といった。それからコザの方にあるのが中央配電。それから嘉手納の比謝川配電。3つの配電会社ができた時、ちょうど高校の卒業と重なったんで、無条件で「お前じゃあ中央配電に5~6名来っていうけどお前も入れてやるけど行くか」、「じゃあ行きます」って言って素直に中部配電ってところに1954年。3月に卒業式で、アルバイトアルバイトアルバイトで本当に勉強もしてなかったんですけど、一応電気科卒ってんで。で、最初中学の時の教頭先生ってのがいて、ある日呼ばれて、「お前松吉さんの息子さんらしいな」っていうから、「そうです」って言ったら、「松吉は俺の同期だったんだ」と。そして、「お前んとこ貧しくて父親学校出られなかっただろ、あれ、貧しくなかったら俺の方が頭下げる位になっていた人間だからお前頑張れ」って言ってくれたことがあるんですよ。

普通高校と実業高校、要するに工業高校とか商業高校とかいうのは、給料で5~6ドル差があったんですよ。普通高校ですと事務見習いでしょ。だけど工業高校、建築科とか土木科とか出たらすぐ使い物になりますからね。それ聞いていたものですから、それで沖縄工業の電気科選んだんです。私の希望としては新聞記者になりたいってのがとっても夢だったもので。新聞で「戦争はダメだ!」っていっぱい書いて出さな

きゃ!って気持ちが強かったものですからね、文系文系と思ってたんですけども、そういう事情もあって理系に入って、それからずっと理系で通して。

菅野 それでは色々とお話いただきありがとうございます。この辺で終わらせていただきたいと思います。大変長い時間お話しいただきありがとうございました。

【本資料は、科学研究費補助金(課題番号:25257009)による成果の一部である】